

はじめに

済生会みすみ病院は2003年3月1日国立療養所三角病院を継承し、誕生した。看護部は国からの移管職員15名、熊本病院からの異動職員29名、新採用職員8名、4看護単位（2つの病棟・外来・手術室）、病床数：68床、入院患者数：29名でスタートした。

活動目標

「医療・福祉を通じて住民が安心して生活できる町創りに貢献します」の基本理念に基づき

- ① 個々の患者のニーズに応え、安心と満足を得られる看護の提供を目指します。
 - ② 地域との連携を深め、看護を継続させるための活動を推進します。
 - ③ 看護師個々の能力を高め、最大限に能力を発揮できるよう研鑽します。
- を看護部の目標に、地域一体型の病院作りを目指した。

活動成果

①については、地域のニーズである「断らない救急」は少ない人員での実践であったが、「みすみ病院へ行けばいつでも診てくれる」という安心と信頼を得るために、全職員一丸となって努力してきた。

②については、開院時より、病診連携会議の開催・外来患者・住民対象の生活習慣病講座の開催や、地元看護職との研修会（11回）を通して情報交換をすることで、地域との連携を築く基盤作りができた。

③については、看護師個々の経験に差があり、高齢者・慢性疾患を対象とした混合病棟では質の高い看護の提供が必要であるため、院内教育の充実を図りながら、院外でのセミナー参加を積極的に促した。また、ワーキンググループ（7G）による小集団活動による学習成果も多くあった。

看護部教育（リーダー 福田 貴代）

院内外での Communication を活性化させ地域、職員間での信頼獲得を目指し、よりよい病院作りのために、組織を構成する「人」が重要な要となるが、その中でも個人の持っている能力を最大限に発揮できることを目標とした。

看護師の経験にも差があり、混合化した病棟で、患者に安全で安心した医療・看護を提供するためには、質の高い統一した看護が重要であるため、院内外の勉強会を計画し、実施を重ねることで教育体制の構築を図った。

2003年度は、88回の看護師勉強会を開催（うち11回は地域の医療機関、福祉施設の看護職・介護職と合同の勉強会）

- ・週に2回 定期勉強会開催
- ・医師による勉強会開催
- ・看護師による勉強会開催

- ・地域の看護職との合同勉強会開催

- ① 院内スタッフだけでなく地域の看護職と共に知識の向上を図っていく
 - ② 済生会みすみ病院の看護について理解してもらう
 - ③ 勉強会という機会を利用して地域との継続看護のために意見交換を行う。
- ・九州ストーマリハビリテーション学会へ1題発表

まとめ

しかし、2003年は住民のニーズにあった診療体制の確保ができない、突然の看護師の退職による人材の損失、入院患者数の確保ができないなど、見知らぬ土地での医療・看護に戸惑いながらの苦労の1年だったように思う。

院内改修工事・最新の医療機器の導入などハード面の整備ができ、今後、さらに急性期病院としての役割を担うことが期待される。

来年度は、回復期リハ病棟の開設、在宅支援・夜間看護加算の取得などの課題に取り組んでいきたい。

2・3病棟 師長 斉藤真理子

2003年3月1日に開設となったみすみ病院においては、国立病院から引き継いだ患者19名をかかえ、2つの病棟（看護単位）で一般病床の混合病棟として稼働し始めた。3月から4月までは定床数68床、5月から7月までは64床、8月から100床となり次年度4月からは140床となる。

フルオープンにむけて随時外来、病棟、救急外来と病床数をみながらのスタッフ配置病棟管理体制であった。

患者層としては、高齢者が多く70歳～80歳代が約66%をしめている。地域に根付いた信頼される病院作りを目指し、今年度は下記3項目を目標として掲げその取り組みを行った。

- ① 病院移設に伴いスムーズな医療体制がとれるようにする。
- ② 救急病院としての機能がスムーズに行えるようにする。
- ③ 地域との関わりを深めるようにする。

①については、内装内設工事が続く中、工事に合わせ新設病棟を順次整備し、環境を整え、円滑に業務が遂行できるようにした。またスタッフ間の円滑なコミュニケーション協力体制の強化を図り、国立病院から済生会病院へ移行した環境、システムの変化動きに合わせた環境の調整、スタッフ教育指導を行った。

②については、救急患者受け入れ体制、業務の整理、環境の整備を行った。効率的に動きやすい環境の整備を随時行

い、24時間体制の断らない救急病院として現在機能している。常に各フロアー応援体制をとりながら病棟、一般外来、救急外来と状況に応じてスタッフ全員柔軟に対応できるように、OJTによる教育指導と勤務調整を行った。

③については、地域行事への参加、地域に開放された勉強会を実施した。地域の人々に済生会みすみ病院を身近に感じてもらうために、全員でみなと祭り等地域行事への参加を行った。また院外に呼びかけ、開放された研修会を行うことで、施設間との交流の機会を持つことができた。症例を通して他施設のケアマネジャー・訪問看護師との合同でカンファレンスを行い、在宅看護への支援を行った。

入院患者数においては、スタートしたばかりで急な病床数の増加はなく徐々に増えて行く傾向にあったため、その間ベッドサイドケアの充実に努めた。高齢者の多い中「寝たきりを作らない」を合い言葉に、転倒防止・褥瘡防止に努めた。またQOLを上げるための嚥下評価症例数も増え、より細やかなケアの充実に努めた。

定床数の増加に伴い、8月からはワーキングチームを編成し、現場における問題について、数人のメンバーを中心に全員で取り組み、安全でより質の高い医療と看護を提供するための活動を始めている。

4 病棟 師長 中村羊里子

2004年3月1日開院時、4階病棟定床40、看護師15名、看護助手4名にてスタートした。2病棟共に混合病棟であり、病棟目標として

- ① 患者中心の看護
- ② 内部体制の確立
- ③ 看護スタッフの教育

を挙げた。

改修工事の進行に伴い、5月に2階へ、8月に3階へ、11月に4階へ移動することとなったため、患者の安心・安全・安楽の確保と、患者の生活環境をより良く整えることを最重要課題とし、継続看護の充実に努めた。

①については、高齢患者が多いことに対応する、看護ケアの標準化を図った。嚥下機能の入院時スクリーニングをアルゴリズムに沿って実施し、個別的な看護ケアを図った。対象患者について嚥下造影を実施し、摂食の自立に向けた訓練方法や適正な嚥下食選択に繋げることができた。転倒転落防止については、入院時に転倒転落アセスメントを行い、危険度Ⅱ以上の場合看護計画を立案し、転倒転落チェックリストを活用することで危険防止を図った。しかしながら、転倒転落事故を完全に防止することは困難であり、事故事例について

SHEL分析により病棟全体のリスクマネジメント認識を高め、対応策を確実に継続できるよう努めた。また、患者個々に応じて介護サービス・居宅支援に関する指導や調整を行い、患者や家族が安心して自宅での生活が送れるよう援助した。

②については、各委員会・ワーキンググループ・リーダー会議の立ち上げに伴い、各グループの活動が病棟での実践に繋がるよう、病棟の環境整備と業務整理を行った。全てのスタッフが病棟において役割を担うよう役割分担した。

③に関しては、教育委員会を通し実施される院内学習会・院外学習会に参加し、基礎知識の習得を図った。8月移動後、固定チームナース・プライマリナースの充実と、看護課程の展開が出来ることを病棟目標としてあげ、日々のケースカンファレンスやチームカンファレンスの充実に努めたが、実施できなかった日も多く十分な成果が出せなかった。看護課程の展開については、データベースの把握・看護上の問題点抽出・個性のある看護計画立案・実施した看護の評価・看護計画の修正について教育を進めてきた。現在、評価日を設定することで看護の評価をすることができているが、計画修正や看護計画に沿った看護実践に繋がっていない。個々の看護課程の展開能力を高めることが今後の重要な課題といえる。

また、回復期リハビリテーション病棟開設に向け、開設プロジェクトチームを中心に準備を進めてきた内容を、当該病棟スタッフが理解し準備に参画できるよう、3月よりカンファレンス・勉強会を行っている。

外 来 係長 澤田幸子

1. 国立三角病院から済生会みすみ病院へ変革の年にあたり、外来診療の確立を図った。
2. 業務内容の標準化を図るため、外来業務のマニュアルを作成した。泌尿器科の検査手順など必要項目の追加見直しを行っている。
3. 予約診療制の確立に取り組み、予約率は80～90%に向上した。患者数が多い日は、30分枠に4人予約で実施しているが、それでも予約外患者があり、待ち時間延長に繋がっている（待ち時間30分～1時間30分）
4. インフォームドコンセントの充実に努めるため、予約前日予約患者のカルテに目を通し、情報収集と問題点の把握に努めている。

また、検査オリエンテーション用紙を作成し、検査に対する説明と情報収集を行い、患者の同意を得ている。

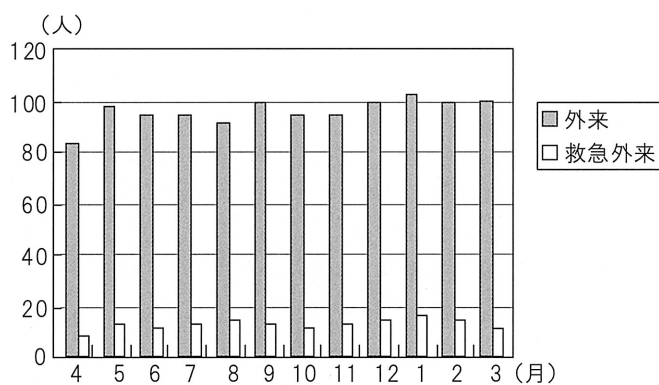
5. 問題の多い患者については、MSWと情報交換し地域の保健師と連絡をとりながらケアにあたっている。

6. 外来患者、家族を対象に生活習慣病教室を4回開催した。

- 1) 高血圧について(参加者25名)
- 2) 糖尿病について(参加者21名)
- 3) 高コレステロールについて(参加者19名)
- 4) 脳梗塞について(参加者20名)

医師による病態生理と日常生活について、栄養士による栄養指導、外来看護師による日常生活の注意点、運動について話した。

7. 外来・救急外来月平均1日患者数

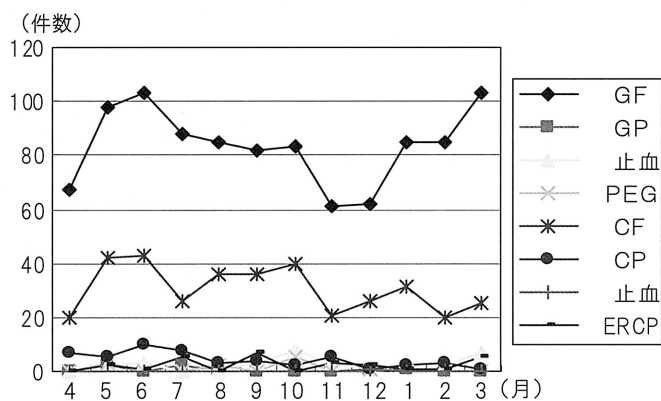


(救急外来患者数再掲)

患者数が曜日によりばらつき(80~150名)があるため、予約調整を行っている。

8. 内視鏡

内視鏡担当技師1名と看護師1名にて対応している。



手術室 看護師 坂田秀美

2003年度の手術室は、新たな環境で、事故なく手術・内視鏡検査が円滑に行えるよう下記を目標に取り組んできた。

- ① 安全かつ安心して手術が受けられる手術体制の整備
- ② 内視鏡検査の知識、介助技術の向上
- ③ インフォームドコンセントの充実

①、③に対しては、麻酔科医への正確な患者情報を提供するためと、患者さんが安心して手術を受けられるように術前訪問を行い、コミュニケーションを通して患者の情報収集に努めた。外科医・麻酔科医との情報交換・連携を密に行い、インシデント・アクシデントなく業務が遂行できた。術後訪問に対しては、十分に行えておらず、術中看護の評価を行うためにも、訪問日を設定し行っていきたいと思う。

②に対しては、経験を重ねるごとに技術の上達と知識が高められ、緊急時の処置にも一通り対処できるようになった。今後は、ポリペクトミー、ERCP等の介助技術の向上を図る必要がある。